

北南
太平記圖會

首卷

友
正成
園心
友
友

親王 護良

1989
/



門 718
1989
卷 1-18

東霞堀經信先生著
雪艇岩瀨廣隆畫圖

南北
太平記圖會

發行書肆 聚星樓

舊版火考記序

蒙竊採古今之變化察安

危之來由覆而無外天之

德也明各體出保國家載

而無棄地之道也良臣鼎



出コレニ守モル社シヤ稷シヨクラ若モシ夫ソレ其ソノ德トク缺カクルトキハ則ハ

雖イデモ有アリト位クラサ不ズ持タテタ所イハ謂ユル要カノ禁ケツ走ハシリ

南ナニ巢サウニ殷イン紂チウ敗ヤブル牧ボク豎ヤ其ソノ道ミチ違タガフキス

則イデモ雖アリト有井威カラス不ヒサシ久カツテ曾キク聽テウ趙カウ高カウ

刑ケイセラレ咸カン陽ヤウニ祿ロク血サニ亡ホロブ屬ハウ翔エヤウニ是コナラ以モツテ

前ゼン聖セイ慎ツシムデ而エタリ得タルコトヲ垂ハウラ法ハウラ於キウ孫ライ來ニ

也ゴウ後コン昆カヘリミテ顧ガランヤ而トラ不イニシラ取イニシラ諷シラ於キ既ニ

往ワウニ乎ニ

前住東福後住南禪坐門扉關肺鍊序

大平記圖會序

阿奈尊穴賢高知也

日大御神乃天地の共常磐迹堅石年

朕皇子の知はむ國中言依て賜は川子此

大皇國赤櫻木於弥継々皇裔乃天下

知食互 天皇八神隨尊く大御座

物部乃八十臣等ハ鹿自物以這拜は



畏^{かしこ}み仕奉^{つかまつり}て海行^{うみゆり}果^い美^み豆^ま久^く如^{ごと}其^{その}好^{この}山^{やま}所^{ところ}を
草^{くさ}生^{せい}る^るあつ^つの大王^{おおう}仕奉^{つかまつり}る社^{やしろ}所^{ところ}を^{あり}あや^{あや}辞^{こと}
立^たて^{あり}者^{もの}皆^{みな}如^{ごと}大^{おほ}御^{おん}玉^{たま}風^{かぜ}を^{あり}有^ある^る御^{おん}事^{こと}を
臣^{おみ}の如^{ごと}く^{あり}這^こ勢^せを^え得^えて大^{おほ}御^{おん}恩^{おん}以^いて^{おぼ}え
致^{いた}奉^{まつ}社^{やしろ}所^{ところ}も^{あり}有^ある^る中^{なか}亦^{また}那^な社^{やしろ}所^{ところ}も^{あり}安^{やす}南^{なん}
各^{おの}禮^{れい}々^々新^{あらた}々^々の御^{おん}事^{こと}を^{あり}買^かひ^かひ^かつ^つ
北^{きた}條^{じょう}の族^{しゆ}様^{さま}も^{あり}其^{その}間^まに^{あり}解^とけ^けの^{あり}横^{よこ}事^{ごと}に^{あり}あ

は
天皇^{てんわう}を^{あり}悔^{くわい}り^{あり}輕^{かろ}志^しを^{あり}奉^{まつ}りて^{あり}
雲^{くも}居^いれ^{あり}を^{あり}遠^{とほ}く^{あり}地^ち場^ばを^{あり}行^い幸^{さい}く^{あり}免^{めん}津^つ生^{せい}は
樽^{ふせ}き^{あり}小^こ室^{むろ}を^{あり}辛^{つら}苦^{くる}の^{あり}社^{やしろ}所^{ところ}を^{あり}た^たか^から
ど^どり^{あり}如^{ごと}く^{あり}此^{この}有^{あり}者^{もの}
後^ご醍^{たい}醐^ご天^{てん}皇^{わう}乃^{なり}其^{その}御^{おん}怒^{いかで}怒^{いかで}御^{おん}積^つり^{あり}御^{おん}執^{しつ}
所^{ところ}乃^{なり}弓^{ゆみ}末^{すえ}の^{あり}大^{おほ}御^{おん}心^{こころ}振^ふり^{あり}發^はせ^せり^{あり}言^{こと}向^{むか}は
大^{おほ}詔^{みこと}命^{のみこと}有^{あり}し^{あり}乃^{なり}即^{すなは}彼^{かの}族^{しゆ}滅^めび^{あり}失^うせ^せり^{あり}名^な

於此猶清まらまて元々の阿南守事は
玉匣二柱乃 天皇の北东南途大御門

始め給は西乃東に國々那存武士等彼方

平伏ひ此方尔致き奉り神世後毛例無支

乱世尔海多音等故是尔法印を等々玄惠

言人をもげ別主其項の人等後世語を等々

やう楠臣乃奇靈の思兼足利兄是れ

腹思を察はる行狀何く運や當時の在仕書綴り

て大平記と號多世尔遺は行瓜此度吾友

堀經信主乃見字く書約め菱河雪艇主尔

詔へて条々其趣意を重きぬ猶世尔弘く為ら

ぬ事ハ常磐に松平らふ吹風も枝を等々

はぬ中今大御世尔生き出る御長に中尔

物去ぬ賤の堀文字辨ぬ意里が北軍まら母

然乎安在の事也。昔の事も、往昔を念ふに
今に現る事なく、樂く在りて大御事を
思ふ事少く、事あるに、事あるに、事あるに、事あるに
一、普記、草に列ふ、事あるに、事あるに、事あるに、事あるに
吾黨の事、感化する事、事あるに、事あるに、事あるに、事あるに

天保五年九月十五日

城戸千精

序

元弘建武之間、逆賊暴虐。

白王統兩分、蓋天下之大亂也。而

旧史所記事、或舉彼畧此、或

及甲不及乙、不得其全、於

其名、臣大夫、義我、亦頗有、繆妄、近

世正史已修。

王道之正。人備之紀。於是乎察
然可觀。砥原甫之於斯書也。
通覽旧史。訂其於正史。撮其
大要。書以國字。專使童蒙不
能閱正史者。讀者以得。不壞旧史

之弊。而明志。與正邪之跡。與
治亂得失之要。則亦足以示勸
戒耳。嗚呼。原甫之用心。可謂
至矣。人或以淺近野乘之類
論之。則豈知原甫之志者哉。
天保乙未秋閏七月書于

寤隱幽居

錦林王府侍臣

主静齋 橋正弘



舊本太平記首卷

来由并名義之辨

此書ハ去建武の頃主上二條の馬場殿にて御遊あり。諸卿武臣堂上堂下に列位す。時ニ新田義貞を召し勅諭して宣く文治より已來數百餘年東夷威を重して天下に普く朝家廢頽日に益たり。故に代々の天子彼を亡し帝徳を四海に昭さんとて獻慮を被りて共事不成して却り皇居を遠島に遷られ給ひ又ハ勢ひ微して黙止給ひるに朕が代に至り逆臣忽ち滅して王法如舊且ハ為後代且ハ當時の玩種共可成然ハ義貞が鎌倉を攻め為躰高氏が六波羅を滅せ形勢記を置せむと仰りるれバ義貞謹て勅答被申る様ハ陛下の洪徳普天之下と昭さんしるハ臣等何ぞ尺寸之謀を以り大敵の勇と碎き侍らん中と日を経て後中納

言藤房卿勅と承く北畠玄惠に宣命有り。因て玄惠新田義貞
足利高氏同直義赤松則祐或ハ大塔宮藤房卿山門の来賢等
會して是を記改事都合十卷なり。則ちこれと呈進す。獻感在て三
品の僧都に任ず。題して義貞鍾倉物語と謂。或ハ高氏六波羅物語
と謂。赤松合戦記と号次。其名不定なりを以て重て玄惠教圓智教の
三僧に命じて。其名を定め校正を加へしむ。三僧尚武士の輩。會して前
後の混乱を正して尚諸国の武士の有功の考れざるを補ひ是を再記。南
禪虎關國師に請く之が序を造らる。初て安危来由記と号す。其後
數輩の識者増記して二十三卷に至る。足利直義已が非と隱むが爲に玄
惠と談じて十之卷已後を焼却せんと欲次。玄惠不諾して曰不可也。断之
ハ後代の人其焼却の罪を記まん唯願くハ公此後を慎で政道正しかりん
事と直義不得止事して不焼之然ども廿二之卷ハ高氏直義一代の思

逆と記すが故。細川頼之入道是を忌て。一天下の内を尋求て廿二之
卷を悉く焼失し。因て當代に在所の廿二之卷ハ後世廿三之卷より
抜出す所有り。自是のち和州多武峯ありて教圓證意壽榮連
秀高德顯成等六人の作者續て此書を記す事十二卷合して三十
四卷と成ち。よして十一之卷より已後の真偽を正し。次第と列ね虚を
除き實を加へく刪補清書す。又永徳壬戌山名氏清南方より班軍
の時。義用義可の両僧は會して又此書を續輯する事五卷。都合三十
九卷とす。其後此書を續ものより遙か年経て横川の僧天界坊能隣
今一巻を作り。改て四十卷に成と云云
凡此書名を改る事四度有り。初は安危来由記と号する事ハ約序語
也。壹部の都合皆安危来由と記して後昆の誠とす。是故に謂らる
其後国家治乱記と改む。覺此書則大なるハ国の治乱を思量し。

小なるハ家の治乱を思量せむ。是故よくハ謂たり。又南朝正平の作者六人談じて国家太平記と稱す。其意前に同りて太平と云事ハ當時の祝り。亦太平の号ハ北朝廷文の頃改て號ともつり。此後應安戊申細川頼之入道常久云。此書捨南朝之治乱等の号。當代を賀し奉らんおめてハ何ぞ謂国家哉。同くハ天下太平とこそありまねくあれと申さるゝより。時の學才等議して天下太平記と號すとつり。或ハ曰太平の文字ハ天下静謐の語なり。何ぞ四海の乱逆を記して太平とある哉。此底ハ代の乱を風する意あり。唐の玄宗揚貴妃に溺ると遂に安祿山が乱あり。然ども詩に太平天子と作る。是其代の乱と議の義なり。今例之云爾者乎。

凡例

○夫太平記ハ本朝元弘建武の正邪を顯し。異国往昔の是非を引て後昆の訓誡とせり。上代ハ文と專として身と脩め。道を行ふ事と嗜む。故ハ八歳より小學に入て文と學ぶ。其中道の道なる知者ハ稀にして道の道なる不辨者多しといへども。常に目に文と見手に文と握故に三綱五常の名を知り。三綱五常の名を知故に道不違ふと不違と知道と違ふと不違と知が故ハ自邪路に入と耻とせり。中古已來貴賤惣て三綱五常の名もあらず。故ハ已が邪正と不辨賢者豈大息しくこれを長嘆せざらんや。因之此書元亨より明德の間の兵草を擧是非得失の趣と述て事を遊戯に準へ和漢の故事と譬に引てハ歳の童子も笑ふへ狂言を加へ七十の老翁も悦ぶ。綺語と交へ其人物の善惡を評して海水の一滴九牛の一毛なりとも。後輩として道は進

いれんと欲す。是此書の作者の肺肝にして、壹部四十卷の中に千萬の思ひを暢るなり。又其千萬の思ひを僅小百十四字小盡しなり。序者濟北師練禪師の能才ありて、一部の眼目皆序にこもり、此序を深く覺さずんば此書の深意あるべからずと云

○太平記の上梓往古より數版あり。片假名本大字小字の二版平假名本画入一版同大全画入一版同片假名大全一版同綱目一版同枕本画入一版同評判一版なり。其余活字版あり異本あり。今此數版磨滅し焼却し紛失して一版も全備するものなり。因て數本を求め合せ考へ此冊を大成し改めて南北の二字を標名の上に冠らしむ

○舊版太平記劔之卷と云とのを附録す。古人云甚以不審る源平盛衰記に可附あり。錯く太平記に附するもの歟或はめる古書の世に散失せん事と惜て後世太平記小附たるも不可知今事の煩

りごとを以て姑除之

○本邦の假名近世新古の差別を分ち其字義を正事至り盡せ。此書いよ古新の假名をきたるる已前の書るを以て頗る混れす。今これを古格に正すといへども尚校正の脱せるものハ後の君子の考訂を待但舊校愚蒙の爲小俗字を用者所り今強て不改之

○冊中の國人物の風姿官服の正式甲冑の制作軍器の異同悉くこれと正し究め上世の紀律と格と新意を加へて假しも舊なる圖を寫る視人として古を思ひ今を感せむ是画者復古の深きより當世甲俗の風姿を破するなり

○此書應永中漢使來朝の時明尹と云者一覽して漢土小渡まじ事と懇請す因て足利義持源公諸山の僧徒に命じて本朝の耻たりへ惡行逆意の甚しきを除き善行武備の潤色すべしと

補ひ。これと清記して彼土に渡り給ふ。此時良文辞てふはの連続
と失ふ事なる歟。況や此書作者一人よりざるに因て一部の中に
述意の齟齬する所有り。年月も前後あり。故事に異説有り。奇
事に虚説あるが故に後世これを難くして一書と著を号して難太平
記とす。又巻部の誤り或校正して虚と省く實と擧ぐる諸家
の寫本或板本等數方ありはわづら然るも今其真と標
準として此國會と編むる童蒙の心を慰ふること薄し。故に
奇説實事の漏脱等を加へ異怪虚談の膾炙せざるを省して。
大旨泰平記綱目同大全の意を以て。新に刪補潤色す。去れ
ども我におめて錯るるに非ず。聊舊版に違ふ所ありを怖る。
唯百歳の童子として盛衰榮枯の理を論し。愚莫作善奉
行の道を教ふ事と本意とす。覽者幸に予を罪しぬ事

ふめま

此書を輯録し次で年歴時日を考索する。豈圖らん哉。茲年
楠公五百年の正當なる事を蓋し楠公者本朝古今の英傑。
此書前後の一人なり。今上梓の時子應で。其遠辰不當なるも
一奇あるに。亦其詠する所の和歌を得。其居城の古圖を得。其
其行跡の陰没して隱する者。正しく頭々の時節到来すと可
謂乎。或ハ天地の感通爰に在て。此書發行弘通の好縁既ふ
熟すと可謂乎。輯者に於て満足なきに非ず。故に此語を凡
例の后に附する事し如て

平安隱士 堀原甫經信謹識

太平記惣計卷作者名録

第壹之卷

山門の乘賢法師北畠玄慧法印と談
く之と輯む

第貳之卷

作者前卷に同

第參之卷

北畠玄慧藤原卿に會て上御一人より竹花撰録
月卿六位に至東夷の爲に苦惱する事記す

第四之卷

作者前卷小おね

第五之卷

作者前卷小おね

第六之卷

大塔宮妙法院宮東夷の爲に苦惱の事及び大塔宮
南都の御危急吉野十津河の艱難等玄惠に命
じて之と記さるる處あり

第七之卷

作者前卷小同

第八之卷

大塔宮の命を蒙て北畠玄慧赤松則祐小會
して赤松一族の戦功を記す

第九之卷

北畠玄慧新田義貞朝臣小會して鎌倉合
戦高時滅亡の次第とあり

第十之卷

北畠玄慧足利尊氏卿同直義朝臣に會し
て兩將の隱謀及び西六波羅の滅亡と記す

第十一之卷

建武中主上山門小御座時楠正成が忠戦の次第と事
世に傳大友小貳行跡五大院右衛門が爲跡と後代の
朝やと山門護正院僧正の命を記さるる處也

第十二之卷

足利直義玄惠法印に會して元弘の政道不正事と記す

第十三之卷

新田足利の確執、義貞の奏狀、尊氏の叛逆、直義の奸曲、奉て南岸坊僧正頭信之れを作す

第十四之卷

作者前卷に同し、但、鷲塚箱根の戦、新田義貞朝臣自記する所也

第十五之卷

正平年中児島高德出家して義清と号し、芳基不居す時に新帝の勅を因り、京中の合戦、尊氏敗北の事を記す、但、多々羅の濱の合戦、壽榮法師記之

第十六之卷

主上正成、關死と歎惜し、其智仁勇の三徳を備たり、事と歡感の余り、壽智坊法印に仰てこれを記す

第十七之卷

此冊作者未詳、恐らく、児島高德か、べし

第十八之卷

作者前卷におかし

第十九之卷

作者前卷におかし

第二十之卷

作者前卷に同し

第二十一之卷

作者前卷に同し

第二十二之卷

此冊児島高德の作す所、越前合戦、新田義助の敗軍、未、尊氏直義二代の悪逆を記す、然に細川常久無念の事に思ひて、此卷を燒失ふ故に、當代の此の卷、其の卷、提出す所也

第二十三之卷

南都の教團上人興福寺法眼證意日野入道連秀児島高德、入道義清、北畠顯成、入道行意、北畠玄重の門人、壽榮、已上六人、和州多武峯に會して、これを作す

第廿四之卷

作者前卷小抄

第廿五之卷

作者前卷小抄

第廿六之卷

作者前卷小同

第廿七之卷

作者前卷小同

第廿八之卷

作者前卷小抄

第廿九之卷

作者前卷小抄

第卅之卷

作者前卷小抄

第卅一之卷

作者前卷小抄

第卅二之卷

作者前卷小抄

第卅三之卷

作者前卷小同

第卅四之卷

作者前卷小同

第卅五之卷

延文中山名氏清南方へ発向し軍を備す刻義
用義可の両僧に命じて此冊を造らしむ

第卅六之卷

作者前卷に抄る

第卅七之卷

作者前卷小同

第卅八之卷

作者前卷に抄る

第卅九之卷

作者前卷に抄る

第四十之卷

横川の僧天界坊能滿これを作て則ち改
都合四十卷と云

惣計終

南北太平記圖會初篇

惣目錄

卷之一

殿上狛犬分破裂南北
 狼籍鳳闕為頼伏白双
 元亨帝即位期太平
 正后無寵准后得幸
 八宗起競欲排禪宗
 清凉殿通翁伏渚講師
 偽閑居俊基廻諸州
 催無禮講密謀鎌倉
 曳愛情頼貞變心

賴貞國長死急軍

資朝俊基下向鎌倉

讀御告文利行蒙現罰

主上行幸南都北嶺

中原章房横死清水寺

卷之二

御隱謀再發覺鎌倉

感敷寫道範貞赦為明

圓觀文觀忠圓引鎌倉

圓觀文觀忠圓所流刑

俊基再被捕六波羅

俊基重下向鎌倉

高資進論定是非

資朝書頌臨誅戮

孝子討父讐逃危

驗者祈舩救阿新

武家議事害俊基

助光收骨登高野山

天起怪異示前相

主上潛遷落北關

偽臨幸師賢登叡岳

山門惡僧闖幸崎濱

臨幸非實山徒變虛

兩門主退八王寺屯

卷之三

應瑞夢正成泰向行宮

正成言下定四海安危

四路東軍圍笠置山

正成赤阪起義軍

高時再發遣援兵

東兵風雨襲笠置

主上逃急潛走城南

供奉鳳輦還幸六波羅

重壁計正成碎東兵

正成濯熱湯惱東兵

正成詐死退赤阪

櫻山入道自伏一宮

卷之四

元僧明極來朝相龍顏

慕父皇幼君詠和歌

中宮紛夜行啓六波羅

先帝遠遷幸隱岐州

追帝駕高德越嶮嶺

高德削櫻樹書節心

笠置囚人處死刑流刑

具行潔死江州拍原

藤房季房謫常州

列婦悲別没大堰河

良忠六波羅吐義言
良忠佯狂脫堅牢

卷之五

宣房屈理仕二君
山門常燈消露不思議
高時興田樂誑妖魔
高時專弄鬪大會
詢菅厩皇妃蒙夢想
尊雲親王經櫃避危急
尊雲親王艱苦南紀
定遍出法騎八莊司
義光獨行奪却錦旗

野長瀬兄弟救親王

卷之六

正成再起赤坂義兵
正成智降湯淺定佛
正成計破隅田高橋
公綱決死向天王寺
遊軍計正成屈公綱
公綱全功退天王寺
正成拜秘記定將卒心
圓心苔繩山奉義兵
高時大起七道兵
正成定計籠千劍破

東軍分三手向三城
人見本間拔懸赤改
追父跡資忠死同條
東兵斷水道降赤改城
時治引兵向金剛山
間牒計害平野將監
岩菊九越嶺陷芳埜
代親王義光死花槽

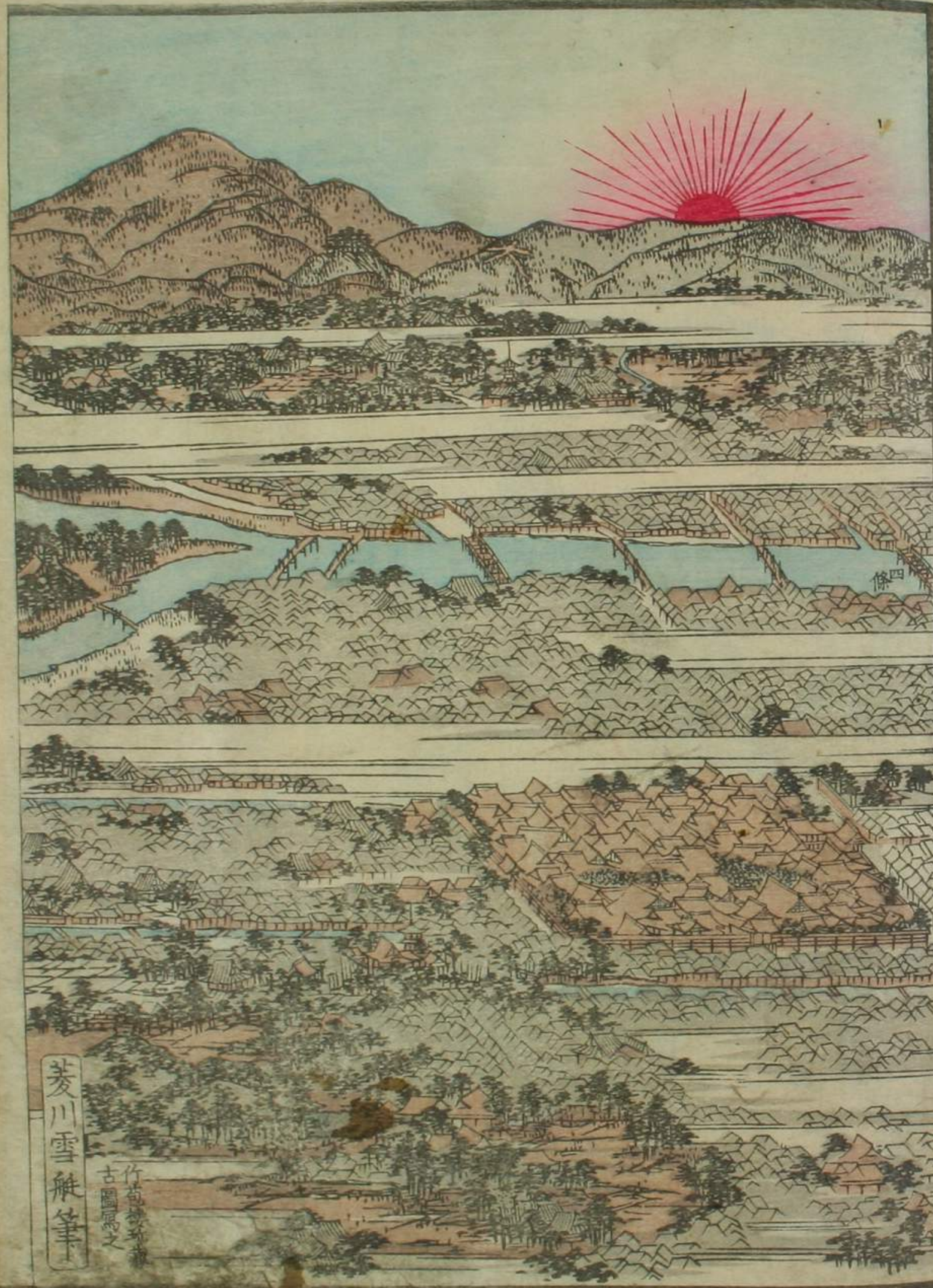
卷之七

百萬大軍圍千劍破城
正成擲石木碎東兵
正成一破名越時在

正成二破名越時在
數百藁人形欺數萬敵
就敵計行味方計
名越伯姪變死遊興
正成墨外燒雲梯
正成謀金澤貞冬
及覆計貞冬損兵
義昌智擒近郷野士
賜綸旨義貞歸軍
公綱崩千劍破砦
正氏正遠夜襲敵陣
伊東赤松開中國

率北之傑繡像

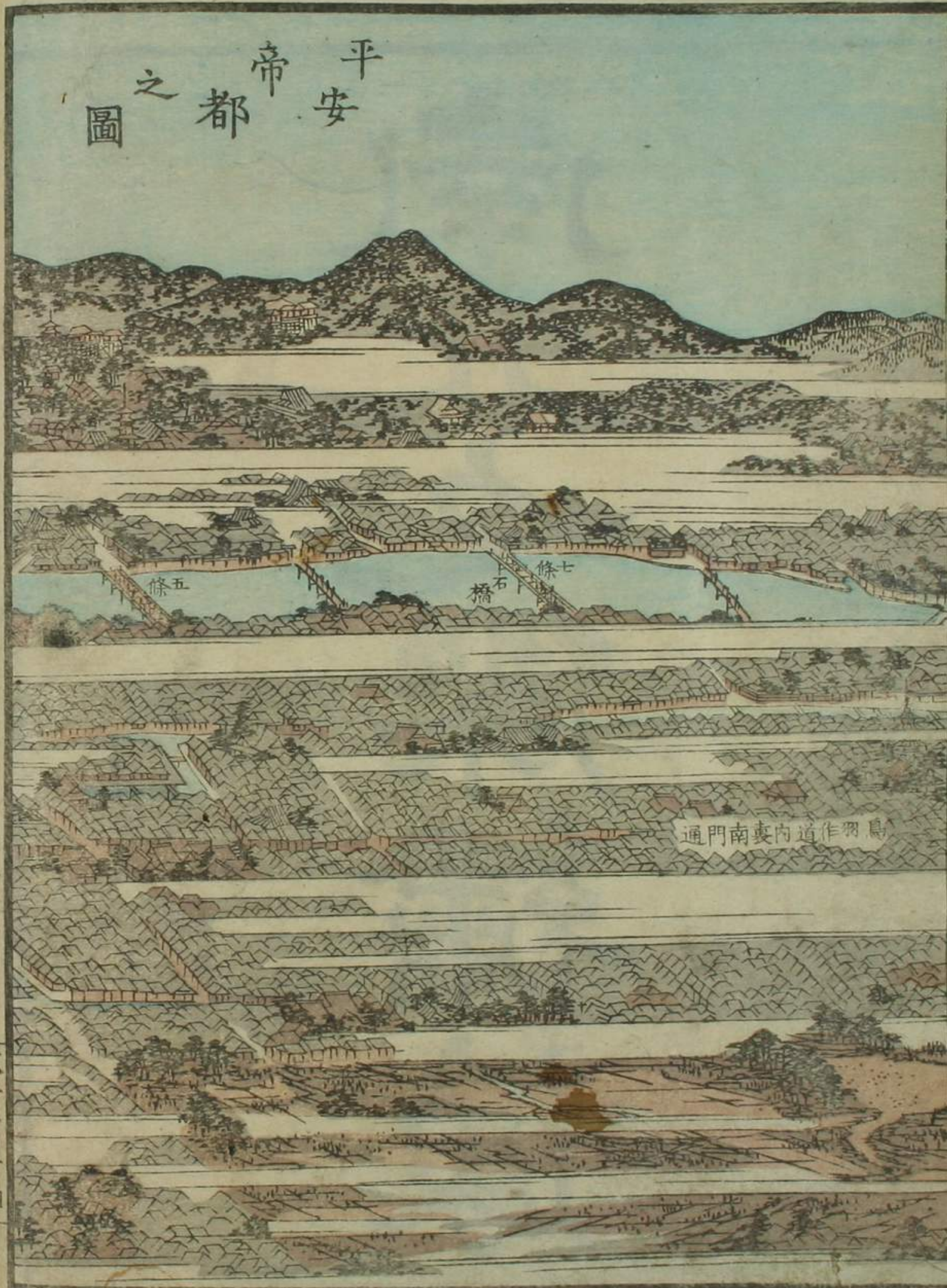
土居得能伏四國
先帝潜遁隱岐州
佛舍利御船救急難
長年募義軍船上山
諸國官軍聚船上行宮



菱川雪舩筆

竹筒抄本
古圖寫之

平安
帝
都
之
圖



鳥羽作道内裏南門通

橋石

條七

條五

條四



雪艇筆



元亨帝第三之皇子
御母者民部卿三位局
北畠大納言師親之女也
幼り廢岳三登り大塔三
御勤學在テ二品門主
名ヲ尊仁ト改メ護良ト
號メ南方ニ兵ヲ擧テ
社稷ヲ興復シ征夷大
將軍ニ任ズ偶足利高氏
ガ奸謀ニ懸リ繼母ノ讒
ニ遭テ鎌倉ニ陸軍ヲ谷
ニ放テ地率ニ囚レ建武二
年鎌倉騷亂紛レ足
利直義多ク被弒テ薨ス

元亨帝第三之皇子
御母者民部卿三位局
北畠大納言師親之女也
幼り廢岳三登り大塔三
御勤學在テ二品門主
名ヲ尊仁ト改メ護良ト
號メ南方ニ兵ヲ擧テ
社稷ヲ興復シ征夷大
將軍ニ任ズ偶足利高氏
ガ奸謀ニ懸リ繼母ノ讒
ニ遭テ鎌倉ニ陸軍ヲ谷
ニ放テ地率ニ囚レ建武二
年鎌倉騷亂紛レ足
利直義多ク被弒テ薨ス



調經餘暇習長機勿著我心綴塔古避
岨山中藺險阻跳身城外廣重圍綠香
社櫻坊坐就豈悟固汲音尼諱熾裡上
書空鳳唱令尺繪卷起殿殿

司 辰陽 岡田雄士贊

尹大納言正二位藤原師賢卿之像

天兒屋根命二十一代大職冠鎌足公十一世大
 政大臣師實公八代之孫花山院從一位內大臣
 師信公之長男也仕後醍醐帝
 御隱謀黨而擢忠誠
 元亨之秋當急
 高時逆命替天
 皇著袞龍之御衣
 登殿岳欺敵同時笠置
 落城之刺為囚被配流下總國
 更不悲歎感時觸興為事諷詠安然而
 送日年味滿強仕其國雉髮無幾程正慶之亂欲義起俄病而示化



藤中納言從三位資朝卿 同國光之中納言幼名阿新丸之像

大職冠鎌足公廿一代之孫正二位權大納言日野俊光卿之次男也元亨帝二
 仕從三位文章博士權中納言
 民部卿三至御隱謀之重臣ト
 師肝ヲ碎タ事露顯ニ
 及テ鎌倉ニ下向シ
 佐渡國ニ配流セラレ元徳二年
 五月廿九日高時ノ命ニ依テ佐渡ノ
 國ノ守護本間山城入道害之時ニ息男
 國光年十三阿新丸ト号ス父ヲ慕テ其國ニ至ル對顔ニ不及シテ父既ニ被戮阿新
 丸ヲ斬却セシ本間三郎ヲ討テ危難ヲ遁レ恙ナク歸國ス後南朝ニ仕ヘテ從三位中納言



北畠從二位中納言源具行卿之肖像

人皇六十二代村上帝第五之皇子。具平親王十代從三位右中將師信御之男也。元亨帝師之宮下申奉ル頃ヨリ。近侍シ奉テ勤厚他ニ異御隱謀無ニ之棟臣タルヲ以テ。笠置落城之時。武家之手ニ捕ハレ。明年六月江州柏原ニ於テ端然ト刑戮ニ就

其世系未考。法曹一道之碩儒タリ。後伏見。後二條花園。後醍醐之四帝ニ仕ヘ朝儀之裁斷君臣之顧問。唯此人ニアリ。元亨之始。御隱謀ヲ直諫シ奉ルニ因テ。密ニ内詔有テ殺害ニ遣

中原左中辨從四位上章房朝臣之像

其世系未考。法曹一道之碩儒タリ。後伏見。後二條花園。後醍醐之四帝ニ仕ヘ朝儀之裁斷君臣之顧問。唯此人ニアリ。元亨之始。御隱謀ヲ直諫シ奉ルニ因テ。密ニ内詔有テ殺害ニ遣



日野右少辨從四位下大内記俊基朝臣之像

いぢへもかりはさめとまき川のわねく流ふ名とや沈めむ

大職冠世代之孫。文章博達。從三位。日野種範卿之次男也。元亨中。儒宗再度御隱謀之智臣ナリ。朝野驚ク。關東ニ下向シ。元徳二年七月。鎌倉葛原園ニ於テ誅戮ヲ受



累世儒門有寵。光參謀。日日侍君王。依稀錯認。擗嚴字。跋涉聊成。道士裝。

雄辯解紛。鑰倉裏。悲歌弔古。菊川傍。臨刑手自題詩。偈恨殺浮雲。隔帝鄉。

萬里小路正三位中納言藤原藤房卿像

衣冠困厄戰塵間
再值朝廷復舊班
無那宸遊憐駭足
何辭直諫犯龍顏
遺榮不戀千鍾富
出世唯餘一鉢閑
遠伴烟霞身已隱
漫傳投老在名山



大職冠錄足公六代正三位大臣冬嗣公十六代之孫贈左大臣從一位宣房公之長男也元亨帝ニ仕ヘテ忠良群ヲ出笠置落城ノ時帝ノ左右ニ侍レテ急ヲ避ル者僅ニ卿ト舍弟李房而已幾程ナク天下興復ノ後驕奢超過シ政道北雜ノ且出卿屢直諫ヲ奉ルニ御許客ナシ因テ建武二年三月十二日遁世シテ北山不二房ニ入テ薙髮ス時二年三十八帝悔テ其父宣房卿ヲシテ其跡ヲ追シム宜房北山ニ至リ玉フニ壁上ニ一首ノ和歌ヲ殘シテ早ク其跡ヲ隱シ諸州ヲ遍歴シテ暫ク越前鷹之巢ニ居シ晚年雖ニ入テ妙心寺閉山國師ニ參見シ大悟徹成シテ其法ヲ嗣妙心ノ二世ニ任ス法諱ハ宗弼號ハ授翁康曆二年庚申三月廿八日示寂ス神光寂照禪師ト謚シ塔ヲ天授院ト云

按ズルニ山紀聞ニ云

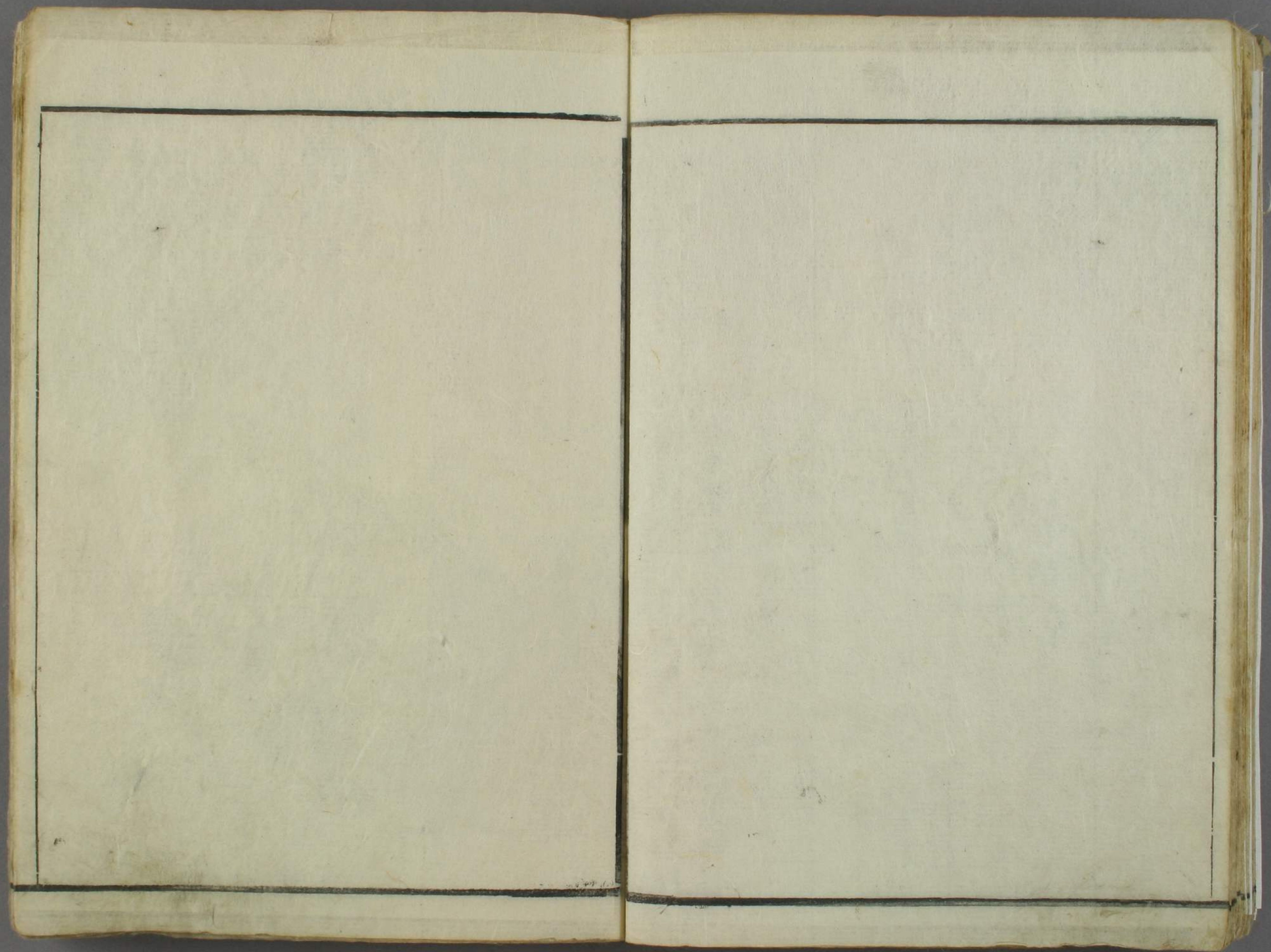
時世のいひやいひも、君父とす、道に
らしむるひびり、さうさうと、さうさうと、
後醍醐帝の人をえ、ひひり、御殿のくさけし
故、山人は、況んや、心さ、さうさうと
いふ、さうさうと、さうさうと、
又或人曰、藤房卿ノ塚、現ニ常州某ノ地ニアリ。此卿、道世
ノ後、近侍ノ士、尚、諸国ニ、隨從シ。卿ノ滅、后、常州ニ、止住ス。今
尚、其孫、殘テ、現ニ、其塚ヲ、警衛スト云
愚按スルニ、元弘元年、笠置落城ノ後、此卿ヲ、常州ニ、左遷シテ
小田、民部大輔ニ、被預ル。余弟、季房卿モ、同国ニ、配流シテ、長沼
駿河守ニ、被預ル。同年五月、高時亡ヒテ、六月、先帝、隠岐国ヨ



リ、還幸シ、玉ヒ、諸国、遠流ノ、皇族、公卿、皆、悉ク、歸洛ス。但、季

房卿、同年、五月、廿、薨ス。然ル時、ハ、彼地ノ、塚、侃、少、法名、若
ク、八、季房、卿、感シ、藤房、卿、名、臣、ナレ、後、世、附、會シテ、其、塚ト
稱ス。者、歟、或、ハ、此、卿、有、縁ノ、地、ナルヲ、以テ、薨去、後、近侍ノ、士、其、地
ニ、分骨シテ、別ニ、法名ヲ、安置セシモ、不可、知、舊、本、太平記、藤房、季
房ノ、兩、卿、常州ニ、左遷ト、書シテ、ソノ、地名ヲ、明ニ、セサレ、是ヲ、正ス。又、ソ
エ、不、得、妙、心、寺、第、二、世ト、稱ス。夏、ハ、此、卿、六、世ノ、法、孫、東、陽、英、朝
禪師、文明、中、宗、門、正、燈、録、并、正、法、山、六、祖、傳ヲ、著、シ、體、此、卿ヲ
授、翁、宗、弼、和、尚、也ト、証、セリ。況、此、卿、逝、去、年、曆、不、久、ニ、偽ヲ、記、升
ハ、何、ソ、其、頃ノ、人物、可、許、之、哉。正、燈、録、ハ、親、迦、文、佛、ヨリ、滴、々、相
兼、ノ、信、證ヲ、明ニ、書ス。如、何、ソ、此、一、條、ニ、限テ、偽ヲ、可、著、哉
尚、後、人ノ、考、索ヲ、待





從三位左京大夫行房卿

大職冠十二代正二位大政大臣伊尹公十二代之孫
 世尊寺從二位中納言經尹卿之長男新田義貞
 之室勾當内侍ノ舎兄也元亨帝ニ仕ヘ
 隱岐國遷幸ヨリ伯耆國ニ渡リ京師
 還幸之間ニ隨從ス
 後建武ノ乱ニ越前
 金崎城陷ル時死之

四條從一位大納言隆資卿

大職冠四代河邊左大臣魚名公十八代之後胤
 正四位下左中將隆實朝臣之長男也正平七年
 五月十七日南軍敗蹟之時陣死

正二位權中納言為明卿

大職冠十二代待堂關白道長公之五男正三位
 權大納言長家卿ノ五代京極權中納言定家
 卿四世之孫權中納言為藤卿之長男也後
 醍醐帝ニ仕ヘテ月花ノ宴ニ侍ス御隱謀ノ

事ニ依テ六波羅ノ疑ヲ
 受テ一首ノ和歌ヲ詠シ
 其疑ヒラ解火焰ノ
 責ヲ遁ル

從三位東宮大進季房卿

贈從一位左大臣宣房公之次男中納言藤房卿
 之舎弟也父兄ト同ク元亨帝ニ仕ヘテ忠節アリ
 笠置落城ノ后常州ニ謫セラレ
 元弘二年五月廿日薨ス

從三位宰相平成輔卿

人皇五十代桓武天皇第ニ之皇子
 葛原親王七代之孫正二位權中納言惟輔卿
 長男也御隱謀之始ヨリ忠誠ヲ盡シ笠置
 落城ノ后鎮倉ニ下向シ早河尻ニテ被戮



土岐藏人頼貞之妻

大液羅ノ侍臣齋藤
 本郎左衛門利行カ
 女ト被藏人頼貞カ
 妻ナリ其夫頼貞
 御隠謀黨ニ奉ル所
 實發覺セバ其夫ヲ密
 ニテ思日キ成跡モ其
 父ト夫トノ數キ大夏
 フ父ニ語テ命ヲ全フス孝貞ノ
 道立テ而シテ夫ニ不義ノ名ヲ
 受レム孰ヲ是トシ孰ヲ非トセン



中宮之侍女佐尾

音曲ニ效シ
 石里小路藤
 房御息所
 一度契情
 三通ス次夜
 更々變在テ王上俄ニ南
 方遷落レ玉ヲ藤房其
 供奉タリ其別ヲ悲ニ
 身ヲ大井川ニ投ジテ貞操
 フ全ス更ハ三之卷ニ詳ナリ



錦織判官代俊政

内裏北面之士御隠謀始ヨリ精忠ヲ
盡ス笠置落城之時
從平ヲ情願シ
子息義石ト
共ニ戰死ス



足助次郎重範

清和天皇四代鎮守府將軍
從四位下左馬頭源滿政十代之
孫參河國住人六郎貞親之一男
也操臂ニノ射ヲ善ス御隠謀ニ黨シ
笠置一之木戸ノ大將タリ落城之時
力戰シテ被捕六條河原ニ於テ被戮

土岐伯耆十郎頼貞

清和天皇四代
多田滿仲
十三代之後胤
土岐頼夏之四男
也御隠謀ニ黨事発
覺ニ及ニテ六波羅ヲ討手
ヲ引受テ生害ス大系圖ハ
頼兼ニ作ル



多治見四郎次良國長

其世系未詳所領濃州ニ在土岐頼貞
ト共ニ御隠謀ニ黨ス事露頭ノ時驍勇
討手ノ大勢ヲ惱ス事數刻遂ニ類從
卒共ニ自伏ス

新田左中將三義源朝臣之像



新田左中將三義源朝臣之像

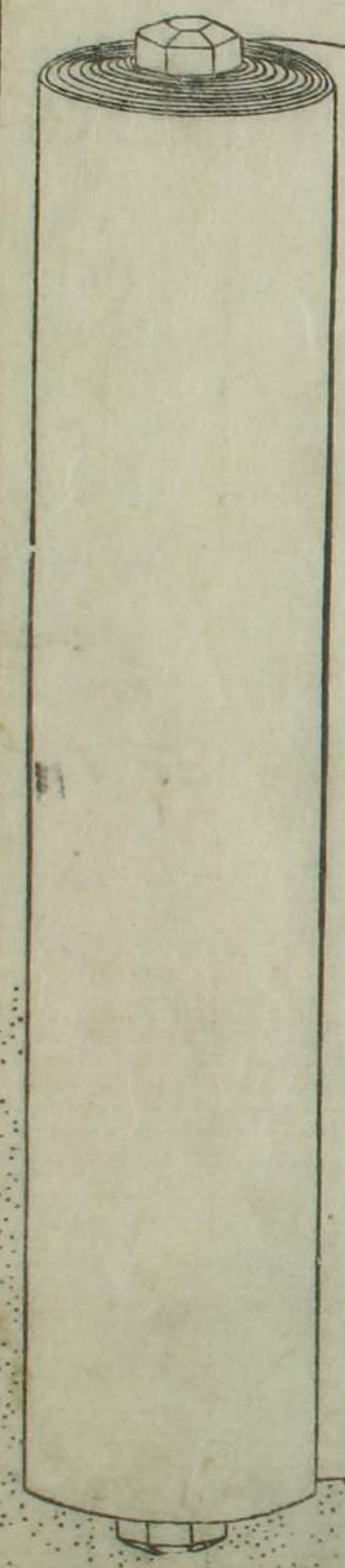
生長血東負異才忽棄機
 會拂風埃燹祈沉劍江潮
 還累勝驅兵地險闔諸谷
 不支如捲菜百樓寒向見
 誓灸穴勛上賞誰賊奪宜
 向朝端受爵來

清和天皇七代之後胤鎮守府將軍源義家十
 代之末孫也父ヲ氏光ト云或氏光ノ孫ヲ朝氏ノ男ト
 云代々上野國新田ヲ領ス故ニ新田ヲ氏トス
 義貞ニ至テ起業ノ志アリ初メ元弘二年北條
 高時ノ催促ニ依テ兵ヲ率テ千劍破ノ城ニ
 向フ軍中ニ於テ大塔宮令旨ヲ申賜ツテ密ニ
 兵班メテ本國ニ及びリ速ニ義兵ヲ揚テ鎌倉ニ
 責入高時及ビ其一類ヲ滅シ重祚第一ノ功ヲ
 抽ス後足利尊氏ト確執シテ其威ヲ争フ尊
 氏關東ニ下テ謀叛ノ時義貞大將トシテ矢
 矧鷺坂手越河原ノ鬪ヒニ勝利ヲ得菅根



竹下ノ戦ヒニ敗蹟セシヨリ華維山門撰南
 ノ軍ニ屢勝屢敗テ牛角ヲナス建武二年一ノ
 宮尊良親王ヲ供シ奉テ諸所ニ艱苦シ
 奮激シテ越前府ノ城ヲ攻落シ
 續テ足羽河ニ軍シ黒丸ノ城ヲ責
 ルニ及テ流箭ニ當テ自害ス

歳三十七



千種從三位參議源忠顯卿之像

具平親王十一代之孫。正二位中納言有忠卿之次男也。左少將。後參議。任中御隱謀。先帝隱岐國遷幸。時藤太夫行房卿ト共ニ。



中興尊爵之榮
三木一草之名
雖乏韜畧殲敵
竟克致身殉國

兼程ナク建武ノ逆乱起テ上下穩カナラス。忠顯亦一方ニ將トシテ屢足利ノ兵ニ當リ。建武三年雲母及ノ合戦ニ討死ス。

數月過テ先帝ヲ誘ヒ潛ニ伯耆ノ國名和湊ニ渡リ。又太郎長年ヲ語ラヒ。船上ニ義兵ヲ奉レヨリ。中国西國悉ク官軍ニ皈レ。一旦四海平定ニ及トイヘトモ。

山徒殿法印良忠之像

叡岳之僧徒ナリ。御隱謀ニ黨シ。元弘元年八月。笠置ノ城ヲ出テ密ニ京都ニ入。綸旨以テ近國ノ兵士ヲ招キ。又山門ノ大衆ヲカタラヒ。笠置ノ後攻ヲ企ケル。九月卅日笠置落城シテ。君六波羅ニ囚レト成セ給フ。良忠心ヲ盡シテ。君六波羅ヨリ奪出シ奉リ。

再ヒ義兵ヲ奉ント欲ス。事露顯ニ及テ。六波羅ニ生捕レ禁獄セラル。良忠佯狂シテ番兵ヲ欺キ。隙ヲ伺フテ牢獄ヲ脱出。其行衛ヲ不知。同三年千種忠顯。赤松回心。足利高氏ト共ニ兵ヲ將テ。南北ノ六波羅ヲ攻破リ。元弘開國ノ功ヲ奏スル事ヲ得タリ。惜哉。後准后ノ綏。口ニ罹ツテ被害。



大塔宮從臣九人 野長瀬兄弟之圖

紀州住人

野長瀬六郎

同 七郎

木寺
相模坊

平賀三郎



岡本三河坊

矢田彦七

村上義隆

赤松則祐

中岡八郎



武藏坊頼乘

光林房玄尊

村上海彦四郎左馬推介義光之像



寧辭畏路屢
屯遣微服潛
行未息肩執
策山中非敢
後奪旗關路
孰能前作逢
王子跳城日
正是男兒伏
双年紀信相
沒遊地下丹
青子必畫凌
烟

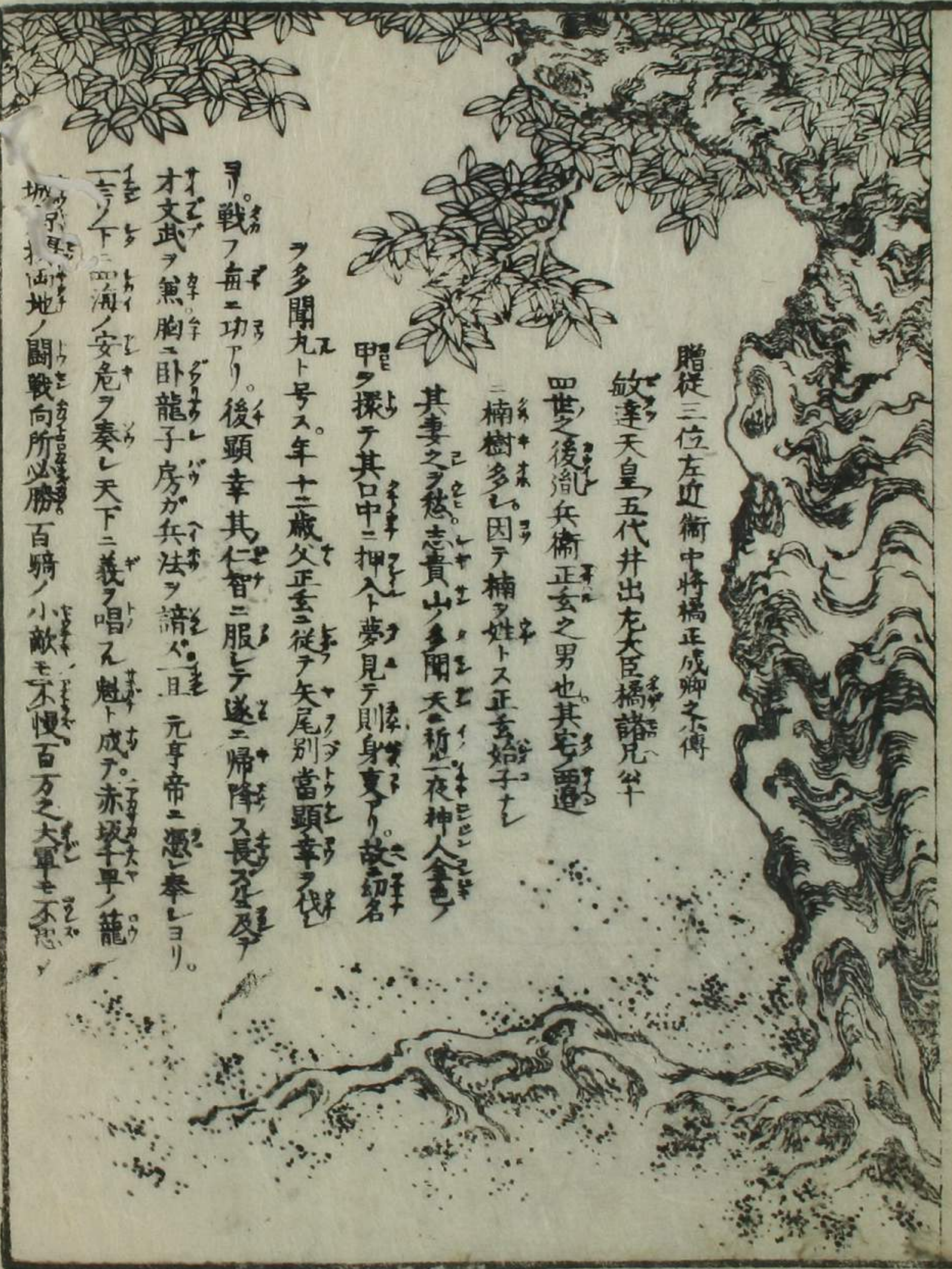
其世系ヲ不知大塔宮殿山御旗上ノ時ヨリ隨從シ南紀御没落ノ路次ニ順
奉テ千辛萬苦ヲ共ニス其刺玉置莊司が官ニ逼テ無是非錦ノ御旗ヲ申シ
賜リ名ヲ怒テ之ヲ曳奪玉置カ士平ヲ擲テ敵ノ膽ヲ挫ク芳埜落城ノ急
ニ當テ御旗御着鎧ヲ乞賜リ御諱ヲ冒シ大塔宮ト名乗テ御命ニ代
リ奉テ自害ス此時義光ノ男藏人義隆父ト死フ共ニヒント欲ス義光
呵之云死サバ君ノ御為ニ可死何ゾ此處ニ無益ノ死ヲナサシ哉義隆理
ニ伏ノ宮ノ御供メ此場ヲ去ル時ニ敵兵宮ノ御跡ヲ追奉ル
事甚タ急ナリ義隆半途ニ踏止マツテ追手ヲ支ヘ遂ニ此
所ニ闘死ス嗚呼此君在テ此臣アリ此父在テ此子アリ實
ニ義光ガ勇ハ北宮黜ニ比スベク忠ハ紀信ト並ビ馳スベレ而シテ
北宮紀信ニ忠孝兼備ノ男子アルヲ不聞

楠河內判官橋正成朝臣之肖像



天王出狩獲非熊
姓氏推來夢卜中
指掌烟塵歸畫策
揮鞭草木待威風
二千堅甲稱無敵
百萬重圍漸斂空
時命難酬恢復志
憂勤遠與武侯同





贈從三位左近衛中將橋正成卿之傳

敏達天皇五代井出左大臣橋諸兄等

四世之後流兵衛正玄之男也其家遺

楠樹多因テ楠ヲ姓トス正玄始ナレ

其妻之ヲ愁志貴少多聞天正初一夜神人金言

甲ヲ探テ其口中ニ押入ト夢見テ則身更アリ故切名

ヲ多聞九ト号ス年十二歳父正玄從テ矢尾別當頭幸ヲ伐

ヲ戰フ毎ニ功アリ後頭幸其仁智ニ服シテ遂ニ帰降ス長を及

才文武ヲ兼胸ニ卧龍子房が兵法ヲ請ム且元亨帝ニ懇奉レヨリ

一ノ下ニ海ノ安危ヲ奏シ天下ニ義ヲ唱ル魁ト成テ赤坂千早ノ籠

城ヲ取リ西地ノ鬪戰向所必勝百騎ノ小敵モ不懼百萬之大軍モ不恐

隨機應變自由ニシテ從臣士卒自在ナリ後奸佞内ヲ亂シ逆賊外ニ

起ニ及テ屢神策ヲ獻ト雖更ニ不用恢復ノ功勞既ニ空カラ下欲ス爰ニ於テ鬪

死ヲ決シ得州櫻井ノ駅ニテ子息正行ニ後復ヲ付屬シテ故郷ニ飯直ニ兵庫ニ發

向足利兄弟が大兵ニ當ラント欲ス公平生禪法ヲ信シ孤峯覺明禪師ニ參見ス此時兵庫殿嚴

寺ニ明極楚俊禪師アリ公合戰ノ前日寺ニ入テ明極ニ謁シ問答數段ニ及テ

一喝ノ下ニ悟徹レ明日湊川ニテ足利直義が大軍ニ蒐合セ堅陣ヲ碎支

數度縱橫ニ切靡一族從臣五十人民屋ニ入テ座ヲ列テ自殺ス于時

建武三年五月廿五日年四十三〇因ニ云漢ニ張良蕭何韓信ニ傑アリ

元亨帝幸ニ亦藤房正成義貞ニ傑アリ彼三臣ヲ用テ漢朝四百

年ノ基業ヲ開是ハ三人ヲ用且神州ヲ恢復ス雖中途ニ空ク逆臣ノ為ニ

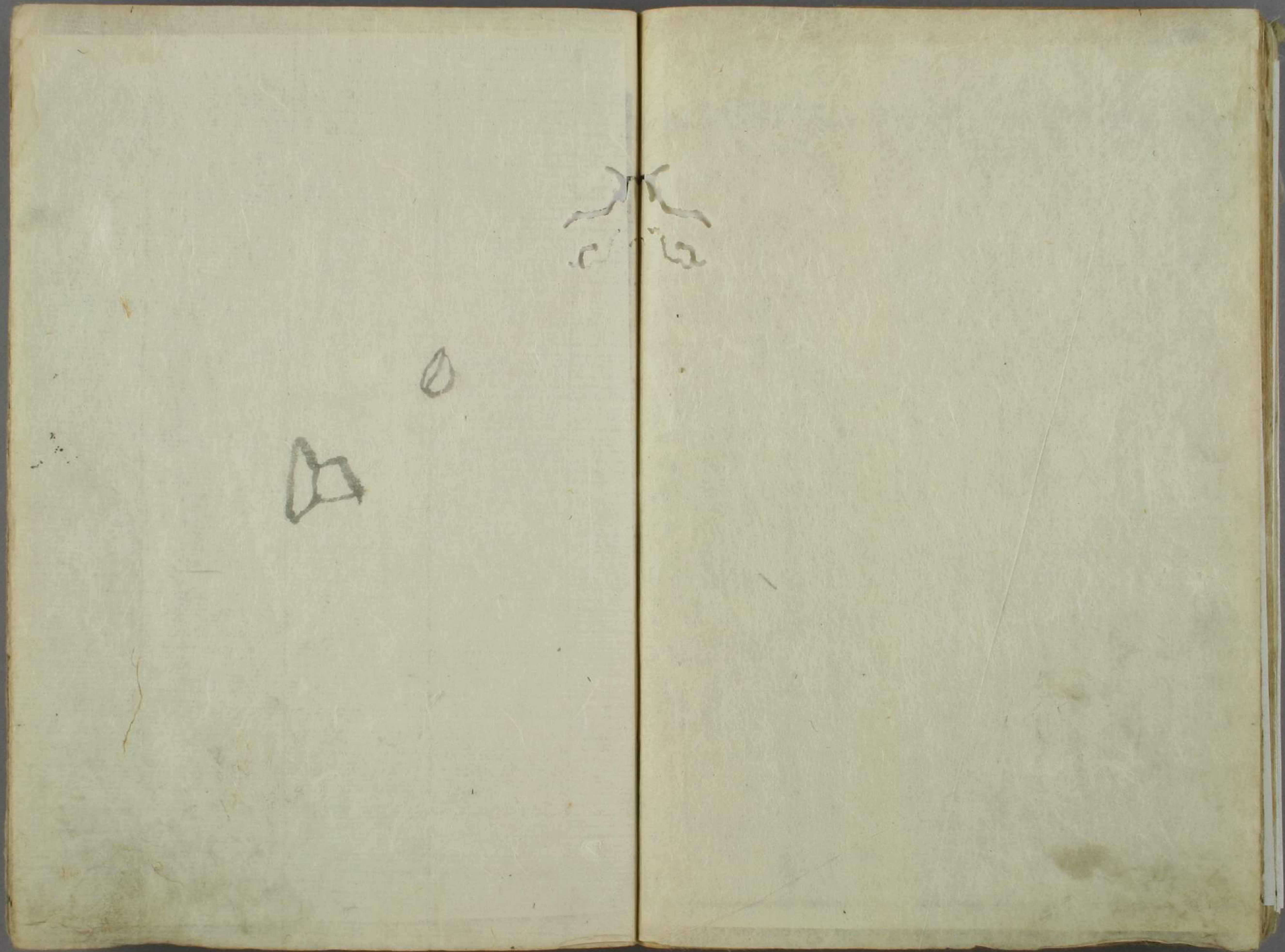
傾又嗚呼天運時命ノ然ル所嗟歎スニ餘アリ正成平生ノ口號ニ曰

仁ト云と男ふやうきぢぢ火うさやけり水はひす

後醍醐帝是古今ノ軍歌ナリト賞シ玉ト云亦勢陽松及三井氏珍藏

ス所此卿自詠ノ懷紙アリ次ニ模寫ス





千早赤阪城陣地理之圖



兒島備後三郎高德之鑄像



備前國ノ住人也。其采地世々備後ノ。兒島ニ在。故ニ兒島ヲ氏トシ。自ラ備後三郎ト稱ス。
 幼ヨリ文ヲ學ビ武ヲ習ヒ。又書ヲ能ス。元弘元年勅ニ應ジ。兵ヲ率ヒテ笠置ニ參向セ。ト欲
 ス。半途ニ落城ノ變ヲ聞テ。空ノ郷國ニ引返ス。明年。主上遠ク隱岐國ニ遣ハレ。幸ノ由ヲ
 聽テ。一族ヲ率テ。路次ニ向ヒ。輒ク天駕ヲ救ヒ奉リ。ト欲ス。然ルニ帝興山陽道ヲ不經。テ山陰
 道ニ行幸ス。因テ高德ガ計策。又事不成。一族已ニ離散ス。高德尚御跡ヲ追テ。雲州院庄ノ
 行宮ニ至リ。密ニ事ヲ謀ト。雖凡。其隙ヲ不得。亦空々故國ニ返ラント欲レ。或夜月ノ明カナルニ
 乘シ。潛行シテ行宮ノ庭上ニ刃心ビ。櫻樹ヲ削テ。二句ノ小詩ヲ書シ。其大志ヲ顯ス。上上ノ伯耆國
 船上山御旗上ノ時。又兵ヲ引テ。速ニ馳加ル。建武ノ乱ニ屢勤王ノ師ヲ出シ。名ヲ変レテ京中
 ニ隱レ。潛ニ尊氏ヲ刺シ。ト欲ス。生涯大事ヲ不遂ト。雖凡。其誠忠節義。至レリ。盡セリ。

當年國事已終。天子蒙塵向海濱。
 斫樹終能書兩句。迎輿元樹奪三軍。
 長期介立堅如石。無奈逃亡散似雲。
 變姓單身為刺擊。堪知一飯不忘君。

岡田挺之

名和伯耆守從四位下長年之肖像

僧龍登出滋嶺
 舉旌首唱証計
 計畫行在安危
 忠義滿出塗旗



其世系ヲ不知伯耆国名和庄ヲ領ノ近国ニ名ヲ被知初ノ又太郎后伯耆守元
 亨帝德岐州ヨリ密ニ伯耆州ニ臨幸在テ深ク憑思食ノ旨宣命ヲ蒙奉
 速ニ族從類ヲ率ヒテ船上山ニ義旗ヲ翻シケルヨリ建武ノ乱ニ及フ
 迄剛勇諸將ニ先ズ后朝野ノ政事不正ヲ歎義貞ノ軍議固ニ違事
 ヲ怨正成ノ早ク闘死セシラ義ム時ニ京童謳ヲ作テ諷テヨ三木一草之
 名二木一草既倒レ一木未枯ト蓋シ三木ハ結城楠伯耆也一草
 ハ千種也是結城親光楠正成千種忠顕ノ速ク没シタレト名和長年未
 ダ存ズルヲ謂也長年此謳ヲ聴テ益憤激シ急ニ陣死ヲ期シテ延元元
 年七月京中ノ合戦ニ勇威ヲ震テ潔死ス

宇都宮治部大輔公綱之肖像



大職冠二十二代。宇都宮參河守貞綱之一男也。初北條高時之仕。頗見驍勇。名アリ。其頃高時歿。之云。関西正成。関東ノ公綱。而勇龍虎ノ如シト。既ニ公綱正成追伐。為ニ天王寺。發向ス。正成速其銳氣ヲ避ニ至ル。又百萬ノ大軍。碎易レテ攻メタル。千早破ノ城ニ向ヒ身士卒ニ先ジテ一擲ヲ碎ク。其雄氣可知。高時亡テ后朝廷其勇ヲ感シ本領安堵スル而已ナラス。向後朝家ノ武臣。可為旨宜命在テ余多ノ新恩ヲ賜フ然ニ城南大渡戰。心ヲ變ジテ俄ニ足利尊氏ニ屬シ。聊所領ニ望有ト雖也。尊氏不其之因テ恨ヲ令ヨテ。幾程ナク捕ニ就テ再ヒ官軍ニ從ヒ。正成戰歿ノ后。義貞ト共ニ洛ニ軍シテ。頗ル英勇ヲ顯ス。義貞北国ト向。后亦尊氏ニ皈降ス。尊氏不容之。其罪ヲ責ム。公綱理ニ伏シ。其罪ヲ謝シ。出家ス。夫勇三アリ。生得ノ勇者。血氣之勇者。仁義之勇者也。生得ノ勇ハ天然ト小恐怖死ヲ不願シテ。遠慮ナシ。血氣ノ勇ハ人ニ勵サレテ。怒氣盛。元則ハ炎ヲ踏滅ニ入ト雖モ。然時過テハ其勇名ニテ。恐怖意アリ。仁義ノ勇ハ平生温和ニ行ヒ。失ナク。度寛ナシ。在義中即ニ義ハ。勇氣凛然トシ。意多。期ス。是ヲ以テ看ニ公綱ハ血氣ノ勇者ト可謂者乎。

恩地左近太郎満一

河州河内郡恩地村之産也。其地神社アリ。恩地明神ト稱ス。故ニ是ラ氏トス。正成ニ從ヒ兵術ニ通理シ。屢軍功ヲ擢ス。

正成戰死ノ后遺命ニ依テ正行ヲ輔佐ス。楠家股肱之老臣タリ。

和田和泉守正遠

正成之族ナリ。初五郎亦孫三郎。後和泉守ニ任ス。才氣豪爽。戰毎ニ勝ヲ得。大系圖ニ正遠ハ正成ノ父也ト云。諸説異同有テ未詳。或云正成ノ父。初正遠ト号シ。後正玄ト改メ。而正遠ノ名ヲ和田五郎ニ讓ル。ト此説恐ラハ可實。



楠攝津守正氏

正成舍弟也。初七郎。後帶カ。又攝津守。奇才。家兄ニ次。正成ノ羽翼トシ。關場必勝ノ功リ。建武三年五月。兵庫湊川ニ決死ス。舊叔。

太平記正季ニ作ル。大全ヲ按ズ。正季ハ正成ノ舍弟也。性勇偉也ト云。又放逸ナルヲ以テ。正成是ヲ扶助セス。正氏密ニ養テ子トス。然ルニ正季某年八月。正氏ニ先達テ卒スト云々。

或ハ曰。正氏后正季ト名ヲ改メ。ト執カ是ナルヲ不知。



忍術達士意多持太郎之圖



初殿法印良忠ニ從テ
 良忠六波羅ニ囚トナル
 刻意多持忍術ヲ以テ
 良忠ヲ救ヒ堅牢ヲ脱セシム中頃
 大塔官ニ仕ヘ新田義貞ニ諭旨ヲ
 紹介セシ者是也後楠正行ニ臣トシテ屢敵ノ管ニ入テ其時變ヲ探ル

名和小太郎左衛門長重之像



名和長年舍弟也元亨帝
 隱岐國ヲ遣テ伯耆州ニ渡リ
 吾深ク長年ヲ憑思食所長年
 猶豫シテ不決長重理非得失ヲ伸テ兄ヲ
 スメ自帝ヲ迎ヘ新薦ヲ脊ニ當テ負奉リ
 船上山ニ臨幸ナシ奉リ兄弟カラ盡シテ天下ヲ復古ス

赤松次郎則村入道圓心之像

人皇六十二代村上天皇之皇子。
 具平親王六代之後胤。從三位
 季房之末孫。性大膽。濶
 容。入ノ下風ニ立事ヲ不好。
 一旦大塔宮ノ令旨ヲ賜テ。
 播州ニ義兵ヲ舉。摩耶菩薩
 繩ニ兩城ヲ構ヘ。屢六波羅
 ヲ伐テ功アリ。遂ニ忠頭高氏ト
 共ニ六波羅ヲ攻破テ。朝家復古ノ
 誠功ヲ奏スト。雖凡高氏ノ奸謀。准后
 ノ御口入ニ因テ。廢賞ナキ。而已ナラス。
 播州ノ兩領ヲ削ラル。惜哉。圓心之ヲ不覺。

朝家ヲ怨テ。建武ノ乱ニ高氏ニ屬ス



總計出像平次菱川清春筆

赤松

高時

兩

義助

五

直義

五

則祐

兩